

シラツチセに残されたアイヌ文化

田 村 俊 之

千歳市教育委員会教育部文化施設課長

はじめに

古代から自然を始めとする地理的環境に恵まれていた千歳は、二万年以上前の旧石器時代から今日に至るまで、人々の生活の舞台となってきた。この千歳で営まれた人の歴史の中で九九割の時間を占めるのが、自然の一部として生きてきた旧石器時代・縄文時代・続縄文時代・擦文人時代の古人たちとアイヌの生活であった。彼らの生活の痕跡は市内各所に遺跡として残されている。

自然と一体になって暮らした最後の人々であるアイヌは、今日の遺伝学的な研究の成果により、縄文人の血を最も濃く受け継いだ民族であることが判明しており、北海道を中心に暮らしてきた先住民族であることは国際的にも認知されている。国内においては、平成二十年六月六日、国会の衆参両議院でアイヌ民族が日本の先住民族であることを認める決議案が全会一致で採択された。

ただし、弥生時代以降、北海道以外の日本列島を中心に暮らしてきた人々もまた、縄文人の血を受け継いでおり、例えば北アメリカ大陸の先住民とヨーロッパからの移住民のように、遺伝学的に両者がまったく異なる民族ということではない。日本列島の中に、はるか昔に別れ、それぞれ別な環境で独自の文化を育んできた血縁関係のある人々が存続してきたといえる。

さて、市内で行われてきた発掘調査により、数多くのアイヌ文化の遺跡が発見されている。それらは一七三九（元文4）年に噴火し堆積した樽前山の火山灰下で見つかり、近世初頭から江戸時代中期のアイヌ文化を知る大きな手がかりとなってきた。

しかし、その後のアイヌ文化の遺跡については、残念ながら確認が出来ない。なぜなら、千歳では一七三九年に積もった樽前山の火山灰の上が、現在我々が生活している地面であり、同じ地面上にある遺跡の確認は困難だからだ。このため、江戸時代中期以降の資料は、主に幕末の蝦夷地の探検家である松浦武四郎が記した日誌などの江戸末期や明治期の文献資料、幕末から昭和にかけての写真資料、民族学者による調査記録などの資料に限られる。

今回紹介するのは、山深い美笹地区に残された明治以降の近代に営まれたアイヌ文化の熊狩に伴う儀礼の場であり、人知れず行われてきた近代のアイヌの真摯な精神文化の一端を示す貴重な資料でもある。

昭和五十八年に調査を行い、翌年三月に報告書が刊行したが、すでに二八年が経過しており、今一度どんな様子だったのかを振り返り、新たな知見も交えて紹介したい。また、調査に伴って執り行われたアイヌ文化による祭事にも触れておきたい。

シラツチセ

「シラツチセ」はアイヌ語である。意味は「シラル・チセ」（岩・家）であり、「岩屋・岩陰」を意味する言葉である。岩陰は人が最も古くから利用してきた天然の住まいでもある。

このシラツチセは支笏湖周辺の河川源流域で幾つか見つかっている。実際のシラツチセとはどんなものであろうか。実は支笏湖の歴史と深い係わ

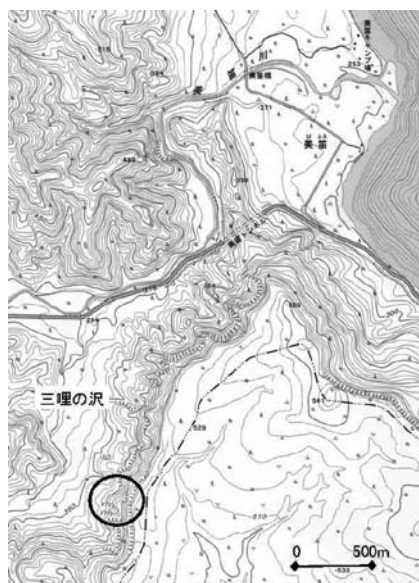


図1 シラツセ位置図

均水深二六五^{メートル}と日本で二番目に深く、水面の標高が二四七^{メートル}なので、湖底は海面より深いところにある。このため貯水量も多く、琵琶湖の四分の三の約二一立方^{キロ}に達する。この大きな湖は、今から約四万二千年前の支笏火山が大噴火によってできた巨大な火口跡（カルデラ）である。

この大噴火は噴煙が高度一〇^{キロ}以上まで達し、火山灰は偏西風によって道北や道東、太平洋まで達し、森林を埋め木々は立ったまま炭になってしまった。炭化した林は「化石林」と呼ばれ、千歳の美々地区などで時々見つかっている。噴出した火山灰や火砕流は数十^{メートル}の厚さで谷を埋め尽くし、苫小牧市や札幌市の南側まで到達し、一部は高熱高压で固まった溶結凝灰岩になり「札幌軟石」と呼ばれている。加工しやすく耐火性が優れていることから倉庫の建築材としてたくさん利用されてきた。

支笏湖の南西部の樽前山や多峰古峰山麓、社台川上流には、この大噴火の時にできた火砕台地である標高約五〇〇^{メートル}の社台台地が広がり、緩やかに太平洋に向かっていている。

支笏湖側の台地縁は凝灰岩が露頭し、湖面からの高さが一〇〇^{メートル}ほどの

りがある。支笏湖は千歳の豊かな自然の象徴であり、湖水面積七八・四平方^{キロ}、周囲長四〇・四^{キロ}で琵琶湖の九分の一の広さ（日本で八番目）をもつ。最大

水深三六三^{メートル}、平

切り立った崖がある。この崖は湖岸の美笛船着場（川口）から三マイルの

地点にあることから「三哩の沢」と呼ばれる美笛川支流の右岸に沿って屏風のように連なっている。アイヌ語ではこの沢は「クツパオマピプイ」（縞状の崖・上に入る・美笛川）と呼ばれていた（図1）。

屏風を成す凝灰岩の崖は、写真1で示すようにところどころで柱状節理が貫入し、硬軟が一樣ではなく縞状にも見える。社台台地からは雨水や雪解け水などが流れ落ち、上から見るとあちこちに虫食いのように台地の縁辺が馬蹄形に侵食されている。この馬蹄形になった崖の下では、やわらかい部分が崩れ落ち、オーバーハングとなつて岩陰を作り出している。

実際に調査した馬蹄形の地形は、図2に示すように幅が約四〇^{メートル}、奥行き三〇^{メートル}ほどあり、岩陰は、馬蹄形の先端部にあり、高さ一二^{メートル}、奥行き二^{メートル}四^{メートル}、ちょうど陰に入る地面は平らで、長さ五〇^{メートル}、三日月形である。崩れ落ちた土砂がテラス状に堆積しており、正面から見るとドームに覆われた屋外ステージのようである。

この大きなシラツセは、雨は吹き込まず、冬でも雪が積もらず、この



写真1 シラツセ遠景

地域で狩猟する際の大切な野営地として昭和二十五年頃までは利用され続けてきたという。調査時には、野営に使用した様々な道具が

残されていた。

岩陰になっていない馬蹄形の中央部分は、一段低くなっており、二〇〇平方メートルほどの広場がある。そこには一辺が四メートル前後の落下した大岩が点在する。

この岩陰の西端に柱状節理の下端が崩れた小さな岩陰がある。高さ約二・三メートル、幅約二メートル、奥行約一・五メートルである。内部には熊の頭蓋骨などが納められており、狩猟によって捕獲された熊を神の国に送る場として利用されていたシラツチセであった。

大きなシラツチセ

大きなシラツチセでまず目に付いたのは、中央にすえられた小熊を入れるためのオリである。長さ八〇センチ、幅一〇センチ、厚さ四センチの割り板四枚を井桁に組み合わせ、根方には小熊が掘り起こさないようにするためか、人頭



図2 シラツチセ平面図・断面図



大の石を埋め込んで補強していた。

割り板は、切断に鋸を使用した痕跡がなく、斧やナタなどの刃跡があり、樹皮が付いたままであった。オリと共に長さ七七センチの木の中央をV字形にえぐったエサ入れが置かれ、オリには山を下るまで大切に飼われていた幼い小熊のものと思われる毛も残されていた。また、オリのそばからは、割れた徳利が二点見つかった。このオリがいつ頃、誰によって作られたかは不明である。

オリのほかには、薪として蓄えられた六〇本もの半裁された木や、カンジキ、まな板、木製のヘラなどの野営時に利用された自家製の道具類があったが、これらは昭和二十五年頃までこのシラツチセを利用してきた千歳在住の猟師たちが残したものである。

小さなシラツチセ

小さなシラツチセは儀礼の場である。いわば生活の空間である大きなシラツチセとは大きな柱状節理によって隔てられ、やや高いところの位置取りは神聖な空間にふさわしい。

ここでは、一三頭分のヒグマの頭蓋骨が見つかった。地表面では下顎骨がないものがあったが、発掘調査をしたところ、一〇センチ下の土中から下顎骨が多数見つかり、八頭分が上下のそろった頭蓋骨になった。

これらの骨は、当時北海道開拓記念館学芸員だった門崎允昭氏によって詳細な分析が行われ、概略は表1のようになっている。年齢や捕殺時期

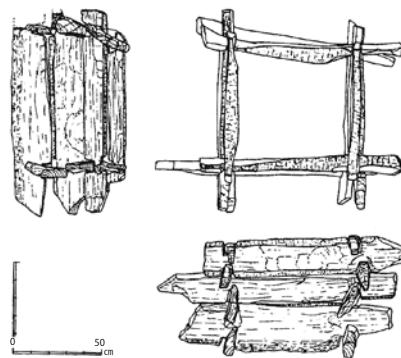


図3 小熊用オリ



写真2 送り場

については歯牙の断面に表われる年輪によって推定された。

側頭部が残る頭骨で左右いずれかに人為的な穿孔があったが、これは捕殺された熊がアイヌ文化の作法にのっとり処理されたことを確定する最も確かな証であった。アイヌ文化において熊は重要な食料源の一つであり、様々な部位を無駄なく利用した。脳も食したが取り出す際に開ける穴の位置は、雄は左側、雌は右

側と定められており、調査した頭蓋骨の性別と穴の位置は完全に一致していた。また、その中の二例では脳を取り出した後の頭蓋骨内にイナウキケ（削りかけ御幣）が入れられていた。

頭蓋骨以外には、イナウ（御幣）などの祭事に使われた木製品が多数確認されたが、いずれも腐食が進行し原形を止めているものは皆無であった。

イナウなどの木製品はシラツチセの壁に立てかけられて片付けられており、一部は土中から発見された。このことから調査された頭蓋骨や木製品は、幾度か人の手による移動があり、本来の位置を保っていないことは確実であるが、この小さなシラツチセが熊の魂を送る神聖な場であったことは確かである。

いつ・誰が

さて、いつ頃この送り場がつくられたのであろうか。子どもの頃、父親とともにここを訪れた事のある古老は、当時すでに白化した頭骨を見たと

いい、現役の送り場として

使われていた状況にはなく、父親もいつ頃のものかは知らなかったという。また、大きなシラツチセの子熊用のオリもすでにすえられていたとのことであった。これらの話から、実際に熊が送られてから一〇〇年ほどは経過している可能性がある。

では、だれが祭ったのであろうか。イオマンテと呼ばれる集落で行う飼

い熊の送り場とは異なり、狩猟によって捕殺した熊を山で送る場であり、捕殺した者が直接行う儀礼である。手がかりは、木製品の中のイナウにあった。イナウの一部にシロシと呼ばれる家代々の印が刻まれていたものと、刻まれていないものがあった。千歳アイヌはイナウにシロシを付けない習慣があることから、シロシが刻まれたものは千歳以外の集団に属するアイヌの手によるものになる。千歳以外の集団とは、地理的な条件を考慮する白老アイヌの可能性が最も高いかもしれない。

頭蓋骨の分析から見える熊猟の実景

頭蓋骨の分析によると、ここで祭られていた熊の捕殺時期は三月から六月までの間で、いわゆる春熊猟によるものである。年齢は二歳未満が五頭、十歳以上が八頭で内五頭が雌であり、三歳から九歳までの年齢層が含まれていない。

熊は、通常三歳までは母熊と一緒に行動するといわれており、二歳未満

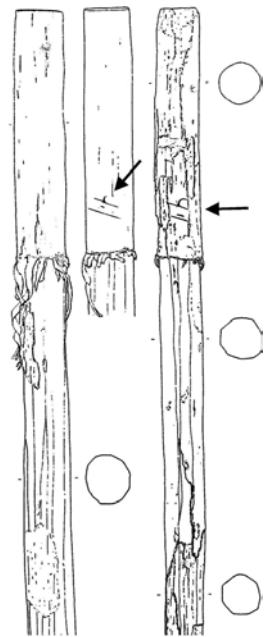


図4 シロシのあるイナウ

の五頭は母熊とともに捕獲されたと思われる。特に表の標本番号6と8は頭骨の中にイナウキゲが同様に詰められていることから、同時に捕殺された親子の可能性が高い。また、他の二歳未満の四頭の小熊もそれぞれ四頭の雌熊と親子だったことは十分に考えられる。

標本番号8の鼻腔に長さ四^三の鉄片が突き刺さっていた。これは冬ごもりの穴から突き出した鼻先を上から突き刺した槍などの破片が残留したものと思われ、春の穴熊猟の様子を具体的に示す貴重な例である。

熊頭骨の慰霊祭

昭和五十八年六月二日、長い間山深く置かれてきた熊の頭骨（熊の霊・カムイ）を慰霊する祭りが千歳文化財保護協会の主催によりシラツチセの前庭で行われた。これは当時、同協会の事務局長だった故・林元一氏の尽力の賜物であった。林さんは、北海道ウタリ協会（現・アイヌ協会）千歳支部の協力のもと人や資材・道具類の準備、参加者の送迎、そして慰霊祭の記録と忙しく精力的に動いていた。

この慰霊祭には千歳在住の七〇歳を超えるエカシ（おじいさん）やフチ（おばあさん）たちも急峻な沢を上り参加する盛大な催しとなった。山の木々は新緑に輝き、まだ葉々の小さい木々の間から陽がこぼれる絶好の天候に恵まれた。エカシやフチは、無事に沢を登れたこと、天気が良くなったのはカムイ（神様）がこの慰霊祭を喜んでる証だといって微笑んだ。

祭事は、祭主としてお願いした静内町の高田勝利氏によって朗々と唱えられるアイヌ語の祈りから始まった。

神への祈りが終わると御酒が振舞われ、やがてウポポ（歌）やホリツパ（輪踊り）がにぎやかに行われた。昼食を終え、慰霊祭は神の国へ祈りを伝えてくれた火の神様に感謝するカムイノミ（神事）を行い、神にささげ

標本番号	頭蓋上顎	下顎	雌雄	年齢	側頭部穿孔	捕殺時期	備考
1	○	○	♂	22～23	左	5～6月	
2	○	○	♂	12～13	左	3～4月	
3	○	○	♂	22～24	左	5～6月	
4	○	○	♂	2	左	5月	
5	○	○	♀	12～13	右	5～6月	
6	○	○	♀	2	右	3～4月	頭蓋腔にキケ充填
7	○	○	♀	16～17	右	4～5月	
8	○	○	♀	10～11	右	3～4月	鼻腔に鉄片・頭蓋腔にキケ充填
9	○	なし	♀	14～15	右	5～6月	
10	○	なし	♀	12	右	3月	
11	なし	○	♂	2	不明	3～4月	
12	頭蓋口蓋部	なし	♂	2	不明	3～4月	
13	頭頂部片	なし	不明	1(幼獣)	不明	不明	

表1 熊頭蓋骨分析結果

たイナウに炉の火が付けられて無事終了したのである。

なお、千歳ではカムイノミの祈りの詞は、大きな声では唱えず、静かに口の中で唱えるものであるとされている。ただしアイヌ文化の理解を深め、広く知らしめるためには、はっきりと伝えることも大切であるとの考えから、現在、千歳でも一般に公開しているカムイノミの際には、声に出して唱えている。

慰霊祭のイノンノ・イタク（祈り・詞）

イノンノ・イタクとは、慰霊祭の際に高田氏によって唱えられた祈りの詞である。和訳は林元一氏によって行われた。ここでは林氏の和訳を元に、筆者が概要をとりまとめたものを紹介する。

高田氏は、シラツチセのほうに並べられた頭骨に向かって語り始めた。

「この熊の神々に対して、今までにもカムイオマンテ（神送り祭）を行ってきたようですが、長い間ここにこうして晒されていたようにも見えます。その事をみんな気にかけていました。

今日の祭りは、シサム（和人）が言い出したのですが、天上の神の国へ熊の神の霊をお送りするために、立派な祈りの詞とイナウと一緒に捧げ拝礼します。

今から神々のいる美しい天上の国へ熊神の霊をお送りする為に、昔お祭りした熊神の頭骨の前に立派な神々に来ていただき、長老達がたくさんのお礼の品として美しいイナウキケや枝幣とともに捧げ、うやうやしく拝礼します。

昔お祭りした熊神の頭骨の前に、お酒とともに美しい着物を捧げ、人々が皆うやうやしく幾度も拝礼しています」。

ここで祈りの座を炉端に移し、炉を中心に向かい合って座していた古老

達とともに火の神様に対してお酒をトゥキ（漆塗杯）からイクパシイ（酒を捧げる箸）によってささげられ、祈りの詞が再び始まった。

「国をおさめる神よ、昔、熊神の頭骨をお祭りした古老たちが豊かなコタン（村）で暮らしています。今、私たちは相談してこの山の中で神々をお招きし、昔この山で獵をした古老達と共に熊神の頭骨を拝礼しています。

神々への祈りの詞を私が皆に代わって申し上げます。人々は皆、神々の霊をお送りし、お祈りをしています。

コタンの人々は、神々のお恵みに浴し豊かに暮らしています。私たちは共にヌササン（祭壇）の神や、山を治める神様などの立派な神様にうやうやしく拝礼しています。熊神の霊を天上の神の国にお送りするために長老達とともに祈りしています。美しい千歳の村で暮らしている男達も女達も今ここで熊神の霊をお送りしています。

シベチャリコタン（静内）から参りました私も、コタンのアイヌとそれ以外の人も共に拝礼しています。水の神やヌササンの神、火の女神にも、うやうやしく拝礼しています。コタンの人もそれ以外の人も共に語り合い、熊神送りの祭りを立派に行おうと拝礼しています。

貴き火の女神様、そして水の神様、神の鳥よ、多くの神々に私の申し上げる祈りの詞をお伝えください。私達は神々に感謝して暮らしています。今、エカシやフチ達と共に神々にお礼を申し上げます。貴き神々へのお礼の品として美しいイナウとともに、トゥキからお酒を神々に捧げています。

神の鳥よ、私の申し上げるつたない祈りの詞を神にお伝えください。本当の獣の神である熊神の霊を、私達は神の国へお送りしています。今、私達は山を支配している熊神の霊をお送りしています。

貴き神よ、私達がそろって心から拝礼申し上げ、神々に感謝しながら暮らしている姿をご覧になってください。

私達は神々へのお札の言葉にそえて、たくさんの立派なイナウをおいしいお酒とともに、感謝をこめて捧げるものとあります」。

このような内容の祈りの詞が抑揚のある朗々とした語り口で唱えられたのである。実際には同じ詞の繰り返しや飾り詞が多く含まれ、もっと長大なものであった。

千歳におけるアイヌ文化の伝承

アイヌ文化の継承という観点から千歳を見ると、明治以降、アイヌ文化の商業化・観光化への方向がとられなかったことが、その後の千歳でのアイヌ文化伝承に少なからず影響をもたらしこととなった。

千歳は、地理的な要因から人々が行き交う土地として栄え、古代から様々な文化や物資が行き交う地域であった。このため本州からの物資は、比較的容易に入手が可能であり、それらの品々はアイヌの物質文化に深く波及浸透し、本州からの物品も自分たちが作り出す品々と同様に生活に欠くことのできないものとして定着し利用されてきた。

一方、葬儀や祝い事などの生活習慣や、信仰などの精神文化は保守的な文化であり、根強く引き継がれ伝承されてきたが、差別的な社会背景の中でアイヌ文化を積極的に外に持ち出すことはなく、家庭あるいは集団の生活の中にとどまった状態で継承されてきたのである。

この結果、千歳では家にいた女性が担う日常的な文化は外的な影響をあまり受けず、古典的なウポポやホリッパが残り、色々なユカラ（叙事詩）やウエペケレ（民話）などの口承文化が良好な状況で伝承されてきた。

一方、男性の担う文化は、狩猟やサケ漁などの様々な節目に必要なカム

イノミなどであったが、これらは本来、その状況が生じたときに個人が個別に行うものであった。今日のように〇〇祭というようにアイヌ文化への理解を進める啓発活動はなく、表立っての儀式は稀であった。狩猟やサケ漁などが非日常化し、男が担うアイヌ文化のほうが消滅しているのではないかと懸念されたが、実際には様々な伝統的な技術や作法、口承文化が伝承されてきている。

近年は、北海道アイヌ協会千歳支部やアイヌ文化伝承保存会を中心に、千歳固有の作法を復元するなど、千歳のアイヌ文化の伝承と保存への地道な取り組みが続いている。

引用・参考文献

- 長見義三『千歳地名散歩』北海道新聞社 昭和五十年
- 佐藤孝雄「熊送りの源流」『新北海道の古代』3 北海道新聞社 平成十六年
- 千歳市『新千歳市史』通史編上巻 平成二十二年
- 千歳市教育委員会『千歳市美笛における埋蔵文化財分布調査』昭和五十九年
- 千歳文化財保護協会『ちとせぶんか』6号 昭和五十八年